

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句またはアラビア数字（算用数字）を記入し、下線部（1）～（5）に関する各設問に答えなさい。

ロシアの国家的起源とされる統一的国家が成立するのは15世紀末のことである。1480年に「タターのくびき」から脱したモスクワ大公国のイヴァン3世は、諸公国を征服してロシアの統一を実現し、ビザンツ帝国最後の皇帝の姪ソフィアとの結婚によって帝国の紋章である「双頭の鷲」を継承しつつ、自ら東ローマ皇帝の後継者として「ツァーリ（皇帝）」を名のった。さらに⁽¹⁾ギリシア正教会の権威を背景として、その専制支配を強固なものとする。正教会の主教座は、14世紀にモンゴルの侵攻を受けて荒廃したキエフ（キーウ）からすでにモスクワに移されており、ビザンツ帝国滅亡後は「ツァーリ」が宗教上の権威をも独自に受け継いだ。彼の孫にあたるイヴァン4世になると、正式に全ロシアのツァーリを称しながら、ルーシの地にとどまらない「ロシア帝国」の建設へと舵を切っていく。専制政治を徹底したイヴァン4世は、大貴族を次々と抹殺したため、人々からは「雷帝」と恐れられた一方、士族層に支えられながら地方行政や軍制の改革を行い、全国的な身分制議會を創設するなど、中央集権化に努めた。イヴァン4世は、対外的にはヴォルガ川中流域のモンゴル系国家である（ A ）を征服し、南ロシアやシベリアへの領土拡大と、その地での⁽²⁾農奴制の土台構築を推し進めて、カスピ海へのルートを開いた。それ以降、ロシアのヴォルガ流域への入植が進んでいく。

ロシアの支配は、1581年にシベリア、1649年にはオホーツク海沿岸に達する。このように70年弱で太平洋に達した背景には、オビ川、エニセイ川、レナ川、アムール川などの河川水系と連水陸路の活用がある。ルーシの首領リューリクの後継者たちが、黒海に注ぐ大河である（ B ）川の水系を利用してキエフ公国を打ち建てたように、キエフ公国の時代にはすでに丸太を横に並べて船に分水嶺を越させる連水陸路によって、縦の河川が横のつながりをもっていた。17世紀になると、「柔らかな金」である毛皮、河川のチョウザメ、海岸のアザラシやセイウチなどが人びとを遠隔の地に引きつけ、入植者に供される黒土が広がるシベリアのステップに移住する人が多く東へ向かった。17世紀にシベリア全域がロシアの支配下に入るが、その名称は16世紀後半、イヴァン4世時代の（ C ）が占領したシビル＝ハン国に由来する。コサックの首領（ C ）は、イヴァン4世からシベリア開発の許可を得た豪商ストロガノフ家に仕えて、シベリア進出を主導した。新大陸の金採掘者と同じような熱気にとらわれて東方へと進んだ外来者に対する地元民の抵抗は、次々と粉碎された。世界有数の透明度を誇るバイカル湖畔近くに、中央アジアと極東を結ぶ交易の拠点となる都市イルクーツクが建設されたのは、17世紀半ばのことである。

ロシアがシベリアから南下してアムール川方面への進出をはかると、1650年以降、清との紛争が生じ、両国は1689年、ピョートル1世と康熙帝の時代に（ D ）条約を締結して、スタノヴォイ山脈と

アルゲン川を両国の国境線と定めた。これは清がヨーロッパの国と結んだ初めての対等な条約であった。モンゴル人が多く住む地域における両国の国境は、ピョートル2世の治世下、1727年にキャフタ条約によって確定された。

ピョートル1世の命令によってアジア・アメリカ間の探検を開始したデンマーク出身の探検家（E）は、カムチャッカ半島を越えてアラスカ「発見」などの成果を上げる。ロシアの東方進出は、北方方面においてアリューシャン列島とアラスカの併合へとつながり、18世紀前半から19世紀後半まで、長きにわたって北米大陸におけるロシアの植民地経営が行われた。⁽³⁾ ナポレオンがモスクワを占領した1812年、カリフォルニアの領有も狙っていたロシアは、北部カリフォルニアの海岸にロス砦という小さい入植地を作る。しかし、その地は1841年にスイス系メキシコ人商人の手にわたり、（F）年にはアラスカが、アリューシャン列島とともにアメリカ合衆国に売却されることになった。他方、アメリカ合衆国は、1845年にメキシコの領土テキサスを併合し、それに伴う国境問題から発生したアメリカ＝メキシコ戦争に勝利して、カリフォルニア・ニューメキシコ両地方を1,500万ドルで獲得した。そして、アラスカ購入から2年後、アメリカ合衆国最初の大陸横断鉄道が開通して西部開拓が進み、1890年にアメリカ合衆国政府はフロンティアの消滅を宣言する。

ロシア帝国が西へと拡大する主要な契機をもたらしたのは、ピョートル1世がデンマーク、（G）と同盟を結び、バルト海南岸のスウェーデン領の分割をはかって1700年に引き起こした北方戦争である。この戦争において（H）が率いる大国スウェーデンが敗北して、バルト海の覇権はロシアに移り、ピョートル1世は隣国スウェーデンから奪った土地に、ロシア帝国の首都としてのペテルブルクを建設した。前世紀から諸外国の度重なる侵略と干渉を受けて現ウクライナ東部地域を失い、国力を衰退させていた（G）は、18世紀末に解体され、現在のウクライナ中部地域とベラルーシの東半分は皇帝エカチェリーナ2世のロシア、ウクライナ西部地域はハプスブルク家の領土になる。

北方戦争での勝利により、バルト諸地方の領有を認められたロシアは、その南下政策にも力を注ぐようになる。ロシアとオスマン帝国は少なくとも8次にわたる戦いを繰り返して、その露土戦争そのものがヨーロッパの国際関係を大きく規定する要素になった。1829年のアドリアノーブル条約を受けて開催された1830年のロンドン会議では、⁽⁴⁾ ギリシアがイギリス・フランスによっても独立を承認され、初代国王を得て王国として誕生した。しかし、そののちイギリスが、オスマン帝国の領土保全へと外交方針を転じることになり、クリミア戦争において国際的に孤立したロシアは、イギリスとフランスに包囲されて、最大の激戦地となった（I）要塞の陥落によって劣勢が決定的になった。この要塞の攻防戦に従軍したトルストイは、陣中で『（I）物語』を記した。その講和条約として1856年に締結されたパリ条約によって、ロシアがモルダヴィア公国とワラキア公国の自治を認めた。そこで、1859年に両公国が合併して連合公国として成立し、1881年に（J）王国へと格上げされる道が拓かれた。南下政策を進めるロシアの足元にこのようなラテン系の国が誕生したことは、ナポレオン3世のヨーロッパにおける威光を高めた。

パン＝スラヴ主義を掲げるロシアは、さらに1875年の⁽⁵⁾ ボスニア・ヘルツェゴヴィナ地方における農民蜂起を契機として、バルカンの正教徒保護を名目に、オスマン帝国との戦争を再び始めることになった。しかし、イギリスとの対決を恐れたロシアは、早々にサン＝ステファノ条約をオスマン帝国と結んだ。この条約は、列強が提示した1878年のベルリン条約で改廃されることになる。その結果、イギリスがロシアの傀儡国家と考えていたブルガリアが縮小され、オーストリアが戦争の発端となったボスニア・ヘルツェゴヴィナ地方の統治権を手に入れた。セルビアとモンテネグロの独立のかたちも、このベルリン条約によって定められることになる。イギリスは、ロシアが19世紀前半から進出を本格化させていた地中海東部地域において、戦略上重要なキプロスの管理権を獲得した。ロシアの南下政策により一段と激化した「東方問題」は、さらに東方にある中央アジアでの諸問題とは異なり、ここにいったんの結末を見るのである。

設問（1）9世紀に建国されたモラヴィア王国は、隣接するフランク王国に対抗するために、ビザンツ帝国からギリシア正教の導入をはかった。モラヴィア王国の要請を受けて、コンスタンティノーブルから同王国に派遣された「スラヴ人の使徒」といわれる人物の名前を記しなさい。なお、その人物は、ロシア、ウクライナ、セルビアなどで使用されている文字の名称の由来になったとされている。

設問（2）ロシア皇帝のアレクサンドル2世が農奴解放令を発布したのは何年か、アラビア数字（算用数字）で記しなさい。

設問（3）1813年秋、ロシアが加わった新しい対仏大同盟の連合軍が、ナポレオン軍を決定的に破った戦いを何とというか、記しなさい。

設問（4）フランスのロマン主義絵画の指導的な画家で、ギリシア独立戦争の際に「キオス島の虐殺」を描いて独立運動を支援した人物の名前を記しなさい。

設問（5）この地方の中心都市で、現在のボスニア＝ヘルツェゴヴィナの首都はどこか、記しなさい。

II 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ I ）に最も適切な語句またはアラビア数字（算用数字）を入れ、下線部（1）～（6）に関する各設問に答えなさい。

ニジェール川は、アフリカ大陸において屈指の大河である。全長4,180キロメートルにもおよぶこの川の水源は、（ A ）共和国の山地にあり、そこで豊かな雨を集めて北上し、マリ共和国の首都バマコを通過してから中流部で大きな内陸デルタを形づくる。その後、川の流れは大きく湾曲して同共和国のガオのあたりで南へ向かい、ナイジェリア連邦共和国に入ってカメルーン共和国から来る支流のベヌエ川と合流し、⁽¹⁾その河口の付近にまた大きなデルタを形成してから（ A ）湾へと注ぐ。乾燥した⁽²⁾サハラ砂漠の南縁に位置するサヘル地域、イネ科などの植物が繁茂するサバンナ、熱帯の多雨林地帯を貫流するニジェール川は、その流域に居住する農業・牧畜・漁業・商業など多様な生業形態の人々の暮らしを支え、西アフリカの歴史において大きな役割を担ってきた。

ニジェール川流域とその周辺では、早くから大規模な国家の形成がみられた。8～9世紀のアラビア語の史料に記録されているのが（ B ）王国である。⁽³⁾11世紀のイベリア半島の学者バクリーは、この王国の首都が王の都と商人の町から構成され、そこでは商人たちがイスラーム教を信仰し、モスクが数多くあったことを記しており、この時代にはイスラーム教が浸透しつつあったことがわかる。この首都であったとみられているのが、モーリタニア共和国の南東部、マリ共和国との国境近くにあるクンビ＝サレー遺跡であり、その人口規模は2万人に及んだと推定されている。

この王国が衰退した後に栄えたのがマリ王国である。マンデ系の人々が建てたと考えられているこの国は、ウーリ王の時代にその領土をニジェール川の中流域へと拡大した。そして、サハラ砂漠の交易都市としてこの頃に台頭したのが（ C ）とジェンネである。ニジェール川の大湾曲部に位置する（ C ）は、西アフリカにおけるイスラーム文化の中心地として重要な位置を占めることになる。なお、サハラ砂漠を縦断する交易では、森林地帯で採掘された金とサハラ砂漠で採集された岩塩が交換された。いわゆる塩金交易である。この西アフリカ産の金は、遠く地中海世界や西アジアへともたらされ、これらの地域の貨幣経済を支え続けた。

このマリ王国にかわって15世紀に一大勢力に発展したのが、ニジェール河岸の交易都市ガオを首都とするソンガイ王国である。ガオに関しては、14世紀半ばにそこを訪れた⁽⁴⁾イブン＝バットウータもその繁栄ぶりを伝えている。ソンガイ王国は、15世紀末から16世紀初頭にかけてのアスキヤ＝ムハンマド王の治世にその全盛期をむかえた。この時代に同王国はイスラーム国家の体制を整え、その支配下の（ C ）も学問の町として大いに栄えて、マグリブやエジプトとの学术交流も盛んになった。しかし、16世紀末、このニジェール川流域の大国は、火器を装備したサアド朝軍の侵攻を受けて崩壊した。サアド朝は、モロッコ中南部の大アトラス山脈の北麓に位置する（ D ）をその首都とした。「モロッコ」の語源になったこの都市は、ムラービト朝の首都として建設され、サハラ交易の拠点として発展した。

ソンガイ王国に続いて台頭したのが、ニジェール川の支流があるナイジェリア北部のハウサランドの小王国群である。ハウサ系の人々が建てたこれらの都市国家は、当初はカノ、カツィナなど7つの国であったが、ハウサの勢力はさらに南へと展開し、やがて熱帯森林地帯に別の諸王国も形成された。ハウサランドの王国の多くはソンガイ王国に服属していた。しかし、ソンガイ王国が衰微すると、安定した農業や牧畜業を基礎に商業活動を独自に活性化させていった。なお、ハウサの商人たちがハウサランドを中心にその商業圏を大きく拡張させていった結果、ハウサ語は現在でもサヘル地域の広域言語として多くの話者に用いられている。ハウサ諸王国へのイスラーム教の伝播は14世紀のことであり、マンデ系の人々によるものとみられている。そして、15世紀以降は、マグリブやエジプトと密に交流していた（ E ）王国からもイスラーム文化の影響がおよぶようになった。チャド湖の周辺に中心拠点を移動させながら発展したこの王国は、11世紀頃からイスラーム教を受容しはじめた。同王国は16世紀後半のイドリース＝アロマ王の治世にその最盛期に至り、現リビアの内陸部のフェッザーン地方までその領土を広げた。そして、チャド湖周辺からフェッザーンを経て、オスマン帝国が支配する地中海のトリポリ港へと延びるルートは、サハラ縦断の主要な交易路の一つとなった。

ハウサランドの南方のニジェール川下流域とその周辺には、13世紀頃からイフェ、オヨなどヨルバ人の小王国がいくつも形成された。そして、この地域で15世紀に勢力を拡大したのが（ F ）王国であった。この西ナイジェリアの王国は、来航した⁽⁵⁾ポルトガルとの交易によってさらに発展していった。この世紀のポルトガルでは、まず「航海王子」エンリケによってアフリカ西岸の探検が奨励され、インド洋航路への道がひらかれた。そして、1481年に国王となり、絶対王権の確立をめざした（ G ）は、この事業を受け継ぎ、さらに積極的におし進めた。彼の治世には、バルトロメウ＝ディアスが現在の⁽⁶⁾南アフリカ共和国の南端に位置する喜望峰に到達し、（ H ）年には、ポルトガルとスペインの間に海外領土の分割に関するトルデシリャス条約が締結された。

（ F ）王国とポルトガルの間の交易では、アフリカ産の象牙や胡椒などが武器や雑貨などと交換された。同王国が首長の一人を使節としてポルトガルに派遣し、ポルトガルの王がこれを歓迎して宴会を開いて返礼の贈物をするなど、当初、両国の関係は友好的であった。間もなくポルトガルに続いてイギリス、フランスなどのヨーロッパ諸国もこの湾岸地域に進出し、交易基地を建設するようになった。そして、西インド諸島や南北アメリカに作られたプランテーションの労働力として、アフリカ人奴隷を大量に運び出すようになっていった。17～18世紀には、大西洋を舞台として、ヨーロッパの武器や雑貨を西アフリカに運んで奴隷と交換し、それを南北アメリカやカリブ海地域に運んで砂糖・綿花などを得て、それらをヨーロッパへと運ぶ、というかたちの商業航海のサイクルである（ I ）貿易が隆盛した。19世紀初頭まで続いた奴隷貿易の時代に、西アフリカから連れ出されて大西洋を渡ったアフリカ人奴隷は膨大な数にのぼり、若年労働力の喪失は西アフリカの社会に深刻な負の影響を与えた。また、こうした湾岸地域におけるヨーロッパ人との大西洋交易の拡大は、西アフリカの海岸部の諸国家を繁栄させたが、ニジェール川流域の内陸諸都市の衰退にもつながったのである。

設問（１）ニジェール川河口の統治権をイギリスが保有することを確認した、1884～85年に開催された
アフリカ分割に関する列強の国際会議の名称を記しなさい。

設問（２）1890年代にこの砂漠地域に本格的に進出したフランスが、そのアフリカ横断政策において
西アフリカ・サハラ地域との連結をめざし、1896年にフランス領ソマリランドとして植民
地化したアフリカ北東部の拠点港の名を記しなさい。

設問（３）11世紀の後半にカスティリヤ王国によって征服され、12～13世紀にアラビア語からラテン
語への翻訳活動が大規模におこなわれた、マドリードの南西に位置する古都の名を記しな
さい。

設問（４）このモロッコ生まれの大旅行家が訪れた東アフリカの諸都市のなかで、現タンザニアの
南部の小島に位置し、12～15世紀に繁栄したが、ポルトガルによって破壊された港市の名
を記しなさい。

設問（５）1510年にインド総督のアルブケルケによって占領され、ポルトガルのアジア交易の重要拠点
とされ、1961年になってインドが武力で併合した、インド西岸の港市の名を記しなさい。

設問（６）国民党の党首として1989年に南アフリカ共和国の大統領に就任し、アパルトヘイト撤廃の
政策を推進し、1993年にノーベル平和賞を受賞した人物の名を記しなさい。

Ⅲ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

「わたしは戦いと一人の男を唄う。運命によってトロイアの岸から落ち延び、イタリアのラウィニアの岸へと初めてやってきた男の歌を。」古代ローマ最大の詩人のひとりが著した、ある英雄の冒険を描く叙事詩は、このように始まる。その題名『（ A ）』は、その主人公の名に由来する。この英雄の子孫からロムルスとレムスが生まれ、彼らがローマを建国したという伝説は、アウグストゥスの時代に、彼がロムルスの再来であるとの主張とともに大いに喧伝され、浸透した。この叙事詩の英雄が「イタリア」の外からやってきたと描かれている点に象徴されるように、地中海の中心部に位置するイタリア半島は、歴史を通じて様々な人びとの集団が行き来する舞台だった。

2世紀以降、異民族の姿がローマ帝国の軍団に見られるようになった。ローマ軍団は服属させた部族に兵士の供出を義務づけたし、帝国と何らかの契約を結んで領内に居住し従軍する部族もあった。個々人でローマ軍に志願する者もいた。しかし、4世紀後半以降、部族集団全体が、しばしば玉突き状に次々と、ライン川やドナウ川を越えてローマ帝国内に移動してくる事態のインパクトは大きかった。そうした移動には、ローマ皇帝による働きかけによって始まったものもあった。たとえば、東ゴート人は、4世紀後半までには黒海北岸からパンノニアおよびトラキアに移動していたが、5世紀後半に、王であった（ B ）に率いられてイタリアに入り、493年に東ゴート王国を建てた。これは、東ローマ皇帝ゼノンが、西ローマ帝国を滅亡させた傭兵隊長オドアケルを倒すように（ B ）を促したからである。

しかし、555年に東ローマ帝国のユスティニアヌス大帝が、この王国を滅亡させた。（ B ）の治世最末期に同王国の都（ C ）で建設が始められたサン＝ヴィターレ聖堂は、現在でも訪れる者を驚かせる壮麗さであり、その内陣にはユスティニアヌス大帝と皇后テオドラの権威を示す巨大なモザイク画が描かれている。こうして短期間ではあるが、イタリア半島全体は東ローマ帝国の一部として政治的に統一された。イタリア半島全体の政治的統一が再び見られるのは、19世紀のことである。

568年に10万人以上の規模で北イタリアに移動してきたのが、（ D ）人である。彼らはビザンツ帝国（東ローマ帝国）治下の（ C ）総督領を奪って王国を建てた。彼らの王国が6世紀末にローマを脅かしたときに同国王と直接交渉して和約を結んだのが、教皇グレゴリウス1世である。彼はイングランドを中心にゲルマン人への布教に力を尽くしただけでなく、西欧における修道院運動の規範となった「戒律」を定めた人物である聖（ E ）の伝記を著した。

（ D ）人の王として特筆されるのはロターリであり、彼らの伝統的法慣習を成文化した『ロターリ王法典』を643年に編纂させた。この王国が752年にローマを脅かしたとき、教皇ステファヌス3世はビザンツ皇帝に救援を求めたが、望んだかたちでは得られなかった。次に同教皇は、フランク王位を事実上握っていた（ F ）に対して「ローマのパトリキウス」の称号を与えるとともに、王としての塗油を行い、救援を要請した。要請に応じた（ F ）がイタリアに2度遠征し、奪還した（ C ）

地方を教皇に献上したのが、教皇領の起源とされる出来事である。そのおよそ20年後の774年に（ D ）王国の首都パヴィーアはフランク王国軍によって陥落し、イタリア北部はフランク王国の支配領域に組み込まれることになった。このときのフランク王は、続く教皇たちを保護し、「ローマ人たちの皇帝」との称号と帝冠を教皇レオ3世によって与えられた。こうして教皇を保護する役割は、東の皇帝から西の皇帝へと移ったのである。しかし、この体制における安定の時代は短いものだった。

イタリア南部にも（ D ）人の勢力は広がっていた。北部の王国からも独立した勢力として、スポレートとヴェネヴェントに広大な征服地を得て、イタリア半島のかたちを長靴として把握したときに、かかどに当たるプーリアの一部にも勢力範囲を伸ばし、ビザンツ帝国の支配領域を削った。イタリア南部のこうした状態は、イタリア北部がフランク王の支配下に置かれるようになった後も、およそ3世紀にわたって続いた。また、長らくビザンツ帝国の支配下にあったシチリアは、9世紀を通じて、チュニジアを中心とするアグラブ朝による持続的な侵略を受けた結果、902年にアラブ勢力によるシチリア征服がほぼ完了する。南イタリアの状況が政治的に大きく変わるののは、11世紀に到来し、当初は傭兵として活動していたノルマン人勢力が力を蓄えていったことによる。1130年にノルマン人の（ G ）が両シチリア王国を成立させ、それ以後もノルマン人勢力下に南イタリアのほとんどすべての地域が含まれた結果、この地域は、ローマ＝カトリックとその公用語である（ H ）語によって特徴づけられるヨーロッパの文化圏に属することになった。

北部に視線を戻せば、955年の（ I ）の戦いの勝利によって、マジヤール人による西ヨーロッパ侵入の試みを終わらせたオットー1世は、ローマでの混乱に介入して事態を收拾しようとし、教皇ヨハネス12世から962年に西ローマ皇帝の帝冠を受けた。いわゆる神聖ローマ帝国の成立である。しかしドイツに権力基盤がある皇帝がイタリアを実効支配するのは難しく、混乱の時代は続いた。世俗権力が実効的な支配能力を失い、教会や聖職者、弱者の保護なども果たされなくなった地域では、司教が、自身の教会の利益を代表するだけでなく、都市の代表として振る舞うことがあった。そして都市の住民団体が徐々に姿を見せ始め、11世紀末から12世紀にかけて、イタリア中部から北部の都市の史料に、都市民の代表としてのコンソリ（執政職）が現れるようになる。コンソリは、12世紀以降の北イタリア社会を特徴づける都市共同体の制度上の頂点に位置していた。都市共同体は、しばしば諸侯や司教などの支配を脱して自治権を確立し、周辺農村をも支配する事実上の領域国家を形成した。こうした自治都市は、イタリア語を用いて「（ J ）」と呼ばれる。ただし、こうした都市の事実上の政治的独立を、皇帝は好まなかった。12世紀から13世紀にかけて、ミラノを中心とする北イタリアの主だった都市が、教皇の支援を得て都市同盟を結び、共同で軍隊を整えたのは、皇帝フリードリヒ1世（バルバロッサ）らのイタリア政策に対抗するためであった。

IV 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

チベット高原は、「世界の屋根」と呼ばれることもある。寒冷な気候と険しい地形は、この地に独特の文化が生み出される要因となった。チベット系の民族は、主にチベット高原から青海・河西地方にかけて活動したが、4世紀には大挙して華北に進出した。匈奴、匈奴の一種族の羯、モンゴル系の鮮卑、チベット系の（ A ）と羌は、五胡と総称された。4世紀以降、五胡は華北で次々と王朝を起こした。（ A ）の苻氏は前秦を建国し、一時は華北を支配した。しかし、五胡十六国時代の大半は、華北に複数の政権が分立して、抗争を繰り返す分裂の時代であった。4世紀初めに、鮮卑系の遊牧民が吐谷渾を建て、チベット系の民族を支配した。吐谷渾は西域と中国の間の中継貿易で一時は繁栄したが、周辺諸国への遠征に積極的だった隋の第2代皇帝の（ B ）に討たれた。

チベットでは、7世紀に（ C ）が統一国家の吐蕃を建て、インドや中国の文化を取り入れて、国の礎を築いた。復興していた吐谷渾も、彼によって退けられた。吐蕃には、インドから仏教が伝わり、チベット仏教の基礎が形成された。カシミール地方のインド文字を基礎として作られたチベット文字は、主に仏典の翻訳や書写のために使われた。皇室の娘を嫁がせて周辺民族を懐柔する政策により、唐は文成公主を（ C ）の息子に嫁がせた。安史の乱の際には、吐蕃は一時、唐の都である長安を占領した。9世紀前半には、唐との間に講和条約が結ばれて、唐蕃会盟碑が建てられたが、9世紀後半になると、吐蕃の王家が東西に分裂して、衰退した。

唐代の雲南地方に建国されたのが、チベット＝ビルマ系ロロ族の王国である（ D ）である。この王国は、唐と吐蕃の対立に乗じて勢力を広げ、9世紀に全盛期を迎えた。仏教文化が盛んで、唐からは漢字・儒教・律令制を取り入れ、チベットやインドの文化も吸収していた。

チベット仏教は、10世紀以降に復興し、13世紀には元朝の保護の下で栄えた。フビライは、チベット仏教のサキャ派の高僧であるパスパを国師とした。フビライがパスパに作らせたパスパ文字は、公文書などに使用された。チベット仏教はチベットからモンゴル高原一帯の諸民族に信仰されるようになった。ところが、仏事供養や寺院建立にかかった莫大な費用は、元朝の財政難につながり、その打開策として乱発された交鈔によって、経済は混乱した。災害や疫病もあいまって、各地で反乱が起きた。14世紀半ばに、（ E ）教徒や弥勒教徒などによる紅巾の乱が起こり、明に大都を奪われた元は、モンゴル高原へと追いやられた。

明の一部の皇帝がチベット仏教を信奉したこともあり、チベットと明の間には深い関係があった。これに対し、世俗との過度な結びつきを戒め、チベット仏教を改革しようとしたのが、黄帽派（ゲルク派）の開祖である（ F ）である。黄帽派は、サキャ派にかわって、チベット仏教の指導的地位を占めるようになった。16世紀後半に、モンゴルの族長として活躍したアルタン＝ハンは黄帽派に帰依し、黄帽派の長に「大海のごとき上人」を意味するダライ＝ラマの称号を贈った。ダライ＝ラマは、観世音菩薩の化身として崇拜され、転生して代々人を救うと信じられている。17世紀には、ポタラ

宮殿が（ G ）に建てられた。かつて吐蕃の都でもあった（ G ）は、チベットの政治と宗教の中心地であり、その名前は「仏の地」「極楽」を意味している。

李自成が明を滅ぼすと、明の武将であった呉三桂は清に降伏し、（ H ）の門を開いた。（ H ）は渤海湾に面した万里の長城東端に位置し、軍事・交通の要衝であった。呉三桂の先導によって、清軍は長城を越え、北京に進軍した。北京への遷都によって、ヌルハチ統治期以来の都であった（ I ）は、副都となった。清に協力した呉三桂らの漢人武将は、中国南部の諸地域に藩王として封じられたが、その勢力の強さは、清朝にとって脅威ともなった。第4代皇帝の康熙帝は三藩の乱や鄭氏政権を平定して、清朝の統治を安定させた。さらに、康熙帝はみずから軍を率いて、外モンゴルのジュンガルを破った。モンゴル人への影響力の大きいチベット仏教の本拠地であるチベットにも、大軍を送った。乾隆帝の時代には、清はジュンガルを滅ぼして、ジュンガル支配下のトルコ系ムスリムの地を新疆と名づけた。

モンゴル・青海・チベット・新疆は、北京に設けられた（ J ）という官庁によって統轄された。これらの地域では一定の自治が許され、モンゴルではモンゴル王侯が、チベットではダライ=ラマが、新疆ではベグと呼ばれるウイグル人有力者が統治することが認められた。